

うしお

第 82 号

昭和 38 年 3 月

目 次

37年度ハマチ養殖実 態調査	調査部 九万田一己	1
一般漁況(2月分)	漁業部	8
2月のマグロ延縄漁況	漁業部	9
漁場観測速報(2月分)	養殖部	10
新川尻ノリ被害原因調 査結果	養殖部	12
定置観測(2月分)	養殖部	16
奄美短信	大島分場	17
各部の動き	編集部	18
分場の動き	大島分場	20

鹿児島市塩屋町十八番地の七

鹿児島県水産試験場

37年度ハマチ養殖実態調査

調査部 九万田 一 己

§ 養 殖 規 模

経営者住所及び名称	養 魚 場		放養尾数	期 間
	面 積	平均水深		
垂水市牛根 牛根養魚場	築堤式 198アール	7,5 m	運搬 36,000 池放流 31,200	5月末 ～ 現在
" 海潟 川畑水産	小割式 金網生簀 (セトロン#16,26 #21,15) 26 21	5×5×5 m 2ヶ 5×5×5 m 2ヶ	16,000	5月中旬 ～ 1月上旬
西桜島村小池浜田水産	" クレモナ16本20節	2K6角 深4,5 m 2ヶ	4,500	7月末 ～ 12月下旬
東町宮ノ浦 岩下水産	" "	" 1ヶ	5,600	6月中旬 ～ 12月
" 岩佐壺	" "	" 1ヶ	3,300	5月下旬 ～ 8月下旬

§ 生 育 状 況

1、築堤式の牛根養魚場では前年に比べて投餌率は高いにも拘らず成長はよくなかった。最大1,3 Kg、平均1,04 Kg。9月までの餌料転換効率が低下している。(放養密度が前年の約1.7倍となっていることも一因であろう)増肉係数9,8 併し歩留りは極めてよく運搬種苗数に対して85%、池放流尾数に対しては98%。寄生虫としてAxine, Benediniaが若干みられたが大きな斃死はなかった。

2、小割式では 破網による逃逸が目立った。

特に東町宮ノ浦(長島)では8月21日夜半襲来した台風12号(0クラス:阿久根上陸～大分県から日本海へぬけた台風)によつて破網があり/経営体は全部、他は約7割を逃逸させた又、垂水市海潟川畑水産では#21/15 21目の金網生簀2個を作

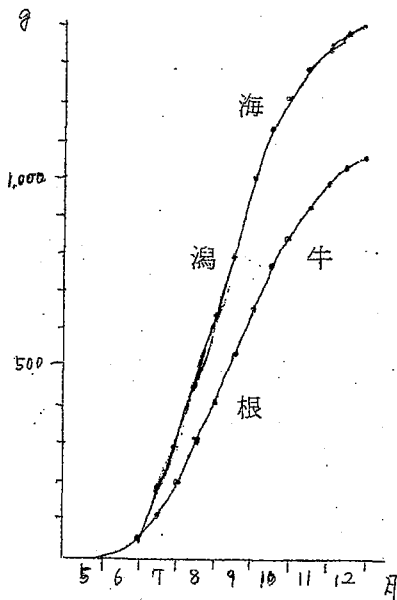
製使用していたが、金網が破れてかなりの逃逸があつた。

3、海潟では6月下旬から Axine の寄生が大量にみられ約 4,300 尾の斃死があつた（中 600 尾は寄生虫駆除試験に使用、結果は別報）従つて逃逸もかなりあつたため歩留りは 36.5% と著しく悪かつた。併し 8 月以降の成長は極めて良好で最大 2.2 Kg、平均 1.4 Kg を示した。増肉係数 7.2。

4、西桜島村小池 浜田水産では 7 月 28~29 日鹿兒島湾奥 桜島白浜沖で焚入 4 般張網（八田網）で平均 200 g のハマチ約 4,500 尾を採捕して 12 月まで養成した。12 月末で 700~800 g に成長。

（投餌率が低かつたものと思われる。 詳細不明）

ハマチの成長



§ 投餌率、成長率、餌料轉換効率

[A 養 魚 場]

期 間 月 日	体 重 g		日 数	投 餌 量 Kg	/尾期間 投餌量 g (F)	日間投餌率 f %	日間成長率 I %	餌料轉換効率 E %
	Wt ₁	Wt ₂						
5 26~31	3,8	7	6	164	23	71,0	9,9	14,0
6 1~15	7,0	16	15	1,184	47,5	69,0	5,2	7,5
16~30	16	30	15	5,990	176	51,0	4,05	7,95
7 1~15	30	125	15	11,733	356	30,6	8,2	26,7
16~31	125	200	16	24,370	760	29,2	2,9	9,95
8 1~15	200	310	15	19,790	630	16,5	2,35	14,1
16~31	310	410	16	31,198	1,040	18,1	1,74	9,58
9 1~15	410	535	15	29,271	992	14,0	1,76	12,6
16~30	535	660	15	29,072	1,020	11,4	1,40	12,3
10 1~15	660	770	15	27,707	1,027	9,6	1,25	13,0
16~31	770	840	16	23,585	950	7,38	0,54	7,32
11 1~15	840	920	15	18,651	795	6,0	0,61	10,17
16~30	920	980	15	17,896	795	5,6	0,42	7,5
12 1~15	980	1,030	15	14,462	827	5,5	0,33	6,0
16~31	1,030	1,040	16	7,952	723	4,38	0,01	0,023
5 12 26~31	3,8	1,040	220	260,173	10,161	8,82	0,9	10,2

增 肉 係 数 9,8

$$f = \frac{F}{\frac{Wt_1 + Wt_2}{2}} \times \frac{1}{d} \times 100$$

$$I = \frac{Wt_2 - Wt_1}{\frac{Wt_1 + Wt_2}{2}} \times \frac{1}{d} \times 100$$

$$E = \frac{I}{f} \times 100$$

[B 養 魚 場]

期 間 月 日	体 重 g		日 数	投 餌 量 Kg	/ 尾 期 間 投 餌 量 g (F)	日 間 投 餌 率 f %	日 間 成 長 率 I %	餌 料 轉 換 効 率 E %
	Wt1	Wt2						
5 18~31	6	12	14	600	75	59,5	4,76	8,0
6 1~15	12	21	15	1,320	139	56,2	3,64	6,5
16~30	21	40	15	2,982	260	56,8	4,15	7,3
7 1~15	40	175	15	3,800	400	24,8	8,39	34,0
16~31	175	280	16	5,300	625	17,2	2,88	16,8
8 1~15	280	445	15	5,250	690	12,8	3,04	23,7
16~31	445	630	16	6,930	999	11,6	2,16	18,6
9 1~15	630	790	15	7,400	1,176	11,0	0,56	5,1
16~30	790	1,000	15	7,800	1,342	10,0	0,82	8,2
10 1~15	1,000	1,125	15	8,200	1,420	8,9	0,78	8,8
16~31	1,125	1,200	16	5,640	972	5,2	0,40	7,7
11 1~15	1,200	1,270	15	3,330	585	3,2	0,38	11,9
16~30	1,270	1,310	16	3,360	600	3,1	0,21	6,8
12 1~15	1,310	1,370	15	2,640	586	2,9	0,30	10,4
16~31	1,370	1,400	16	585	234	1,1	0,14	12,7
5.12 18~31	6	1,400	228	65,137	10,103	6,3	0,87	13,8

增 肉 係 数 7.2

§ 水 揚 販 売 状 況

月	市場名	A 養 魚 場					B 養 魚 場						
		売 上 尾 数	平 均 個 体 重 量 ^g	Kg 当り 単 価			一 尾 当 価 格	売 上 尾 数	平 均 個 体 重 量 ^g	Kg 当り 単 価			一 尾 当 価 格
				最 高	最 低	平 均				最 高	最 低	平 均	
9	鹿児島												
	熊本												
	地元	2,002	488	250	220	247							
	計	2,002											
10	鹿児島	120	780	250	220	243							
	熊本												
	地元	3,295	766	280	250	258	39	1,100			350		
	計	3,415	766	280	220	256	39						
11	鹿児島												
	熊本												
	地元	2,447	910	300	280	294	271	1,190			300		
	計	2,447	910	300	280	294	271						
12	鹿児島	4,040	1,040	330	200	291	1,887	1,300	330	240	280		
	熊本	1,032	不明				312.5	1,040	1,380			350	
	福岡	5,058	〃				299	40	1,400			312.5	
	都城	100	938										
	地元	4,498	1,020	300	280	294	1,972	1,400	300	270	278		
	計	14,728					4,939						
1	鹿児島	1,990	1,020	500 470	300	417							
	地元	2,933	1,047	350	320	330	589	1,400	300	270	280		
	計	4,923					589						
総 計		27,515	残尾数	約 3,100			5,838	残尾数	0				

§ 支出割合

費目	A	B
種苗費	3,15	9,2
餌料費	51,8	61,5
動力費	2,0	2,9
給料手当	6,43	9,6
販売雑費	5,9	6,3
旅費	1,6	
消耗品費	0,6	
通信費	1,13	
会議費	0,11	
接待交際費	1,6	
備品費	1,7	
燃料費	1,21	0,6
借入金利息	2,94	
修繕費	3,4	
光熱費	0,4	
施設償却費	5,17	7,9
傭人料	7,2	
食糧費	0,8	
法定福利費	0,5	
研究費	0,27	
雑費	0,6	2,0
採捕費	0,13	
宣伝広告費	0,6	
清掃費	0,76	

利益見込額

§ 付帯施設

	A	B
○ 冷蔵庫		
HP	15	5
坪	10	4
施設費	230万円	70万円
○ 餌料運搬船		
噸数	3	八田曳船・網船兼用
HP	25	
(自動車エンジン)		
購入費	22万円	
○ 投餌船(伝馬船)		
隻数	2	2
購入費	6,5万円	
○ 従業員数		
常備	3	1
○ 人夫雇傭数		
延	8,20名	約50名 (八田船乗子)

§ 魚種別、仕入先別 餌料購入割合とKg当り単価

A 養 魚 場

Kg当り総平均単価 1,295円

仕入先 魚種	あじ		きびなご		かたくちいわし		はだかいわし		雑魚	
	割合	単価	割合	単価	割合	単価	割合	単価	割合	単価
鹿児島市場	35.3%	15.6円	13.0%	13.4円	1.0%	19.0円	0.18%	2.1円	0.33%	9.3円
志在志	7.8	9.6			0.19	11.0				
東串良	4.8	11.0			0.85	17.0				
古江	0.8	12.0								
地元	31.5	10.0	極少	15.4	3.7	10.0	極少	10.0	極少	20.0

B 養 魚 場

Kg当り総平均単価 13円

仕入先 魚種	あじ		きびなご	
	割合	単価	割合	単価
鹿児島市場	0.4%	17.2円	10.6%	13.9円
枕崎	10.0	10.0		
内ノ浦	7.7	9.9		
土々呂	4.3	20.5		
地元	67.0	13		

一 般 漁 況 (2月分)

漁 業 部

※ 東海サバはね釣

2月鹿児島港入港隻数は4隻、41,600 Kgを水揚しており1隻平均10,400 Kgで1月の平均36,700 Kgに比べると著しく漁獲が低下している。

漁場は前月と大差なく557、547、549、539区である。魚体は300～350mm程度で1月と大差はない。

※ 瀬魚/本釣

大型船は前月と変わらず東支那海漁場(沖縄西方)で4000～6000 Kgの漁獲をしている。

小型船は七島近海で800～2000 Kg程度の漁。

※ 巾着網

東海物の水揚で市場は賑わっているが、漁場は451区、270区、462区、264区附近。

漁獲物は主として大、中、アジ。

※ マグロ延縄

2月中の調査船は8隻。ビンナガを目的として紀南礁近海で操業しており、一航海4,000～8,000 Kgを水揚している。

※ カツオ/本釣

カツオ/本釣は枕崎港で大型船(遠洋漁船)23隻で578吨、山川港で、大型船5隻で12吨を水揚している。

漁場はいつでもフィリピン南方海域である。

2月のマグロ延縄漁況

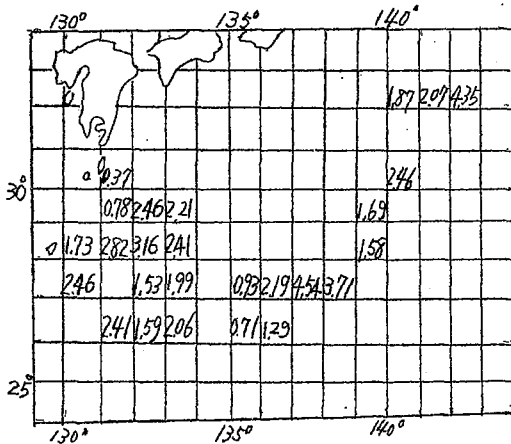
漁業部

2月は入港隻数は少く、調査隻数も8隻だけであつた。漁場は、
26°~33°N、131°~143°Eで主漁場は

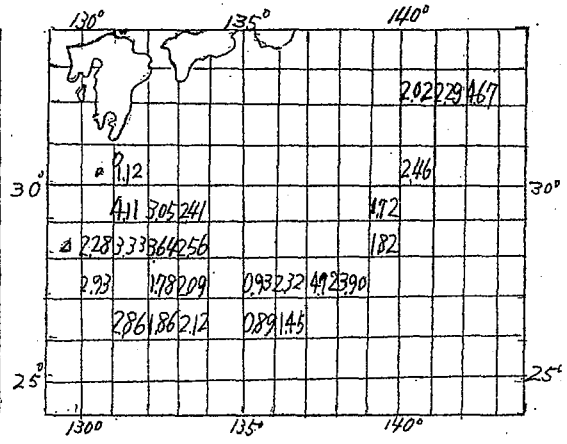
前月を大蓋ない。釣獲率を前月と比較すると右表のとおりで、2月は1月よりビンナガが2.35と高くなつてゐる。又キハダは、2月はやゝ漁獲が増しており組成41%、釣獲率0.11を示している。

	1 月			2 月		
延操業隻数	171			92		
延使用枚数	29,2420			154,128		
ビンナガ	4179	1.43	74.8	5,673	2.35	81.7
メバチ	750	0.26	13.4	295	0.18	6.6
キハダ	175	0.06	3.1	182	0.11	4.1
マグロ類計	5,104	1.75	91.3	4,150	2.65	92.4
メカジキ	74	0.03	1.3	50	0.03	1.1
マカジキ	8	0.00	0.1	14	0.00	0.3
クロカジキ	2	0.00	0.0	1	0.00	0.0
シロカジキ	1	0.00	0.0			
フウライ	24	0.01	0.4			
カジキ計	109	0.04	2.0	65	0.04	1.4
マグロ カジキ計	5,213	1.78	93.3	4,215	2.69	93.8

左段 漁獲尾数
中段 釣獲率
右段 組 成



※1図 ビンナガ釣獲率 (38年2月)



※2図 マグロ・カジキ計釣獲率 (38年2月)

漁場観測速報（2月分）

養殖部

I 旬別平均水温

観測地 旬別	水成川		葛輪	
	最高	最低	最高	最低
上旬	14.25	12.96	11.40	10.70
中旬	14.49	13.69	11.20	10.85
下旬	14.09	13.21	11.25	10.25
月平均	14.29	13.38	11.29	10.63
前月差	-1.81	-1.52	-3.11	-3.17
前年差	-2.34	-1.97	-0.98	-1.35

○葛輪の月平均水温は前月より約3℃低下し、前年同期に比べ約1℃低目を示した。

○水成川では前月より約1.5℃低下し、前年より約2℃低目となっている。

II 漁況

1、水成川

旬別	魚種	瀬物	小ダイ	イセエビ	タルメ	アマダイ
	上旬	有漁日数	8日	3	0	0
延出漁船数		23隻	13	0	0	6
漁獲量		445kg	105	0	0	40
中旬	有漁日数	5	9	1	2	0
	延出漁船数	15	36	3	8	0
	漁獲量	148	169	1	120	0
下旬	有漁日数	4	1	3	1	0
	延出漁船数	11	3	9	4	0
	漁獲量	220	15	13	80	0
計	有漁日数	17	13	4	3	2
	延出漁船数	49	52	12	12	6
	漁獲量	813	289	14	212	40

○瀬物：磯建網による漁獲で、前月の4倍の水揚を示したが、

/日 /隻平均では約 / 6 Kgで前月の / / Kgに比べてやや上昇したに過ぎない。

○小ダイ： / 2、 / 月には漁獲がなかったが、本月から再び水揚げされ、 /日 /隻平均 5.5 Kg。

○イセエビ：僅か / 4 Kgの水揚で前月の7分の /。

○その他：タルメ、アマダイが漁獲され、 / / ~ / 月までのシビ漁は終漁した模様。

2、葛 輪 (下旬の漁況は記載なし)

旬別	魚種	ガ ラ	雑魚 (イサキ、キヨリ、クサビ、タイ等)
上旬	有漁日数	4日	6
	延出漁船数	33隻	30
	漁獲量	420Kg	720
中旬	有漁日数	1	1
	延出漁船数	20	6
	漁獲量	240	180
計	有漁日数	5	7
	延出漁船数	53	36
	漁獲量	660	900

○月間水揚 / 560 Kgで、 / 月の2.5倍を示した。

○雑魚：イサキ、タイ等の雑魚 / 本釣が主で /日 /隻平均 2.5 Kgと好漁。

○ガラ (和名不詳)： /日 /隻平均 / 2 Kgの水揚を示す。

新川尻ノリ被害原因調査結果

養 殖 部

I 現 場 調 査

1、日 時 昭和38年2月23日 11時～13時
(低潮時刻 13時00分)

2、のりヒビの張込み状況

第3図Aに示すように190枚(重ね張り2枚)のヒビが建て込まれていた。

3、のりの着生状況

第3図Bにみるように空港側約半分はアオノリ類が着生し南港側にアサクサノリが着生していた。

4、のり被害状況

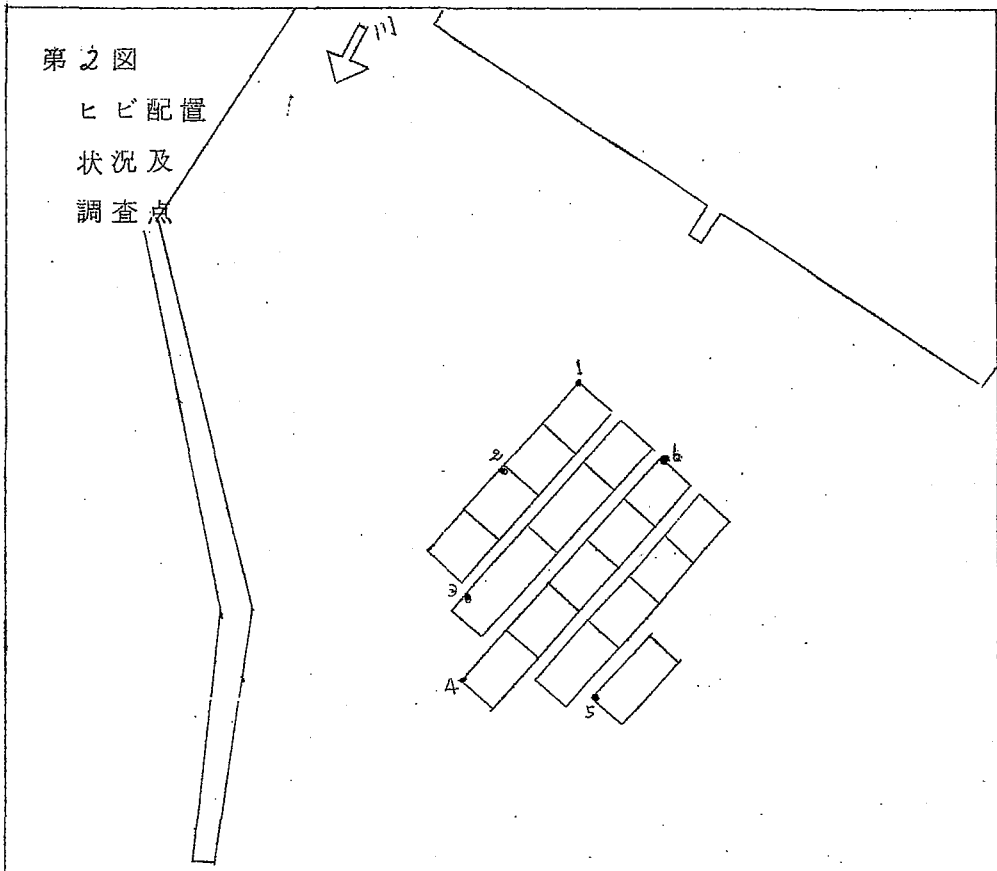
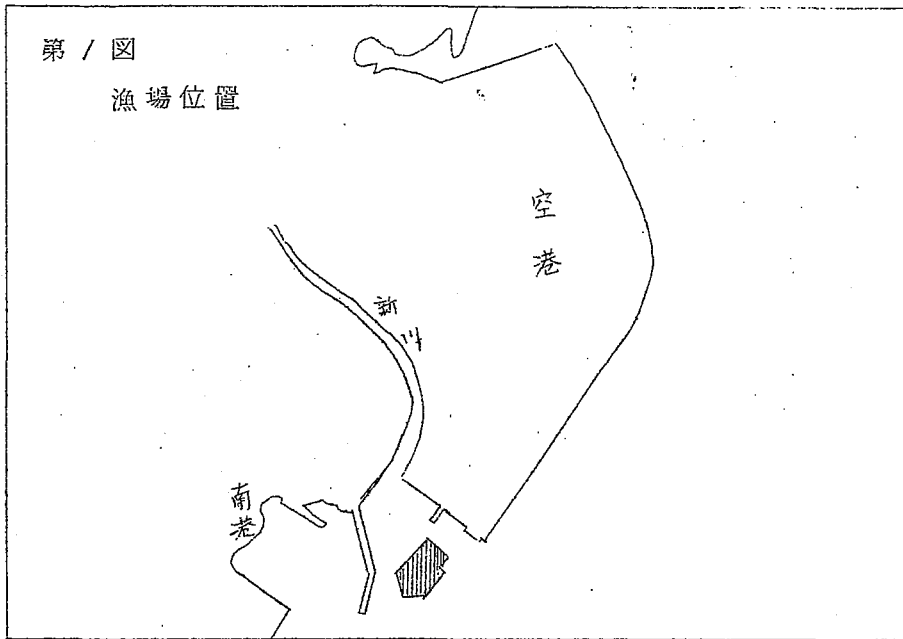
第2図に示す調査点について、水温、比重を測定すると共に被害の状況を観察し、ノリ資料を採取した。

観察方法は 1、油脂の着生の有無、2、ノリの変色、流失程度を五官で行った。

第1表 調査結果 { 一認めない、十やゝ認める、++普通
に認められる。+++多く認める。

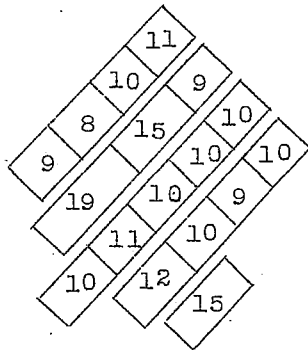
St No.	時刻	水温	比 重 (測定値)	油脂の着生	ノリの変色 、流失	備 考
1	11,25 ^m	15,4 ^{°C}	25,8	+	-	
2	11,33	15,4	19,8	++	+	
3	11,40	13,6	9,5	+++	++	
4	11,47	13,8	10,0	+++	++	
5	12,09		25,4	++	+	水温計破損
6	12,15		23,2	+	-	

○第1表に示すように調査点2～5では、ノリの変色、流失が認められ、特に3、4点ではノリはヒビに着生したまゝ癒着変色(灰色)し、ノリ葉体の形は全くみられず、油脂臭があり、手

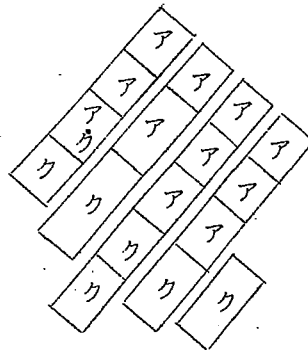


第3図

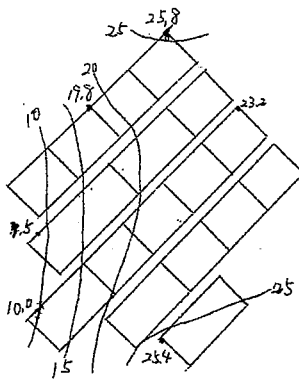
A ヒビの張り込み状況
(数字はヒビ数)



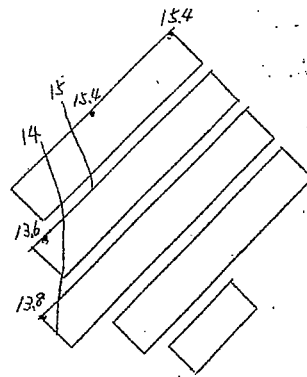
B ノリの着生状況
{ ア…アオノリ類
ク…アサクサノリ類 }



C 測定比重の分布



D 水温の分布



に粘着する程であつた。

- 調査点1、6は肉眼的にノリの変色等は認め難いが、摘採すると、手に油脂がベト着く状況を示した。
- 第3図、C、Dに比重、水温の分布を示したが、南港側の淡水(川水)の影響の強いところほど、ノリの被害も大きいことから被害を与えた油脂は川によつて流入していたことを示すと考えられる。
- 油脂抽出、分析用としてノリを採取した。

II ノリに附着した油脂の抽出と分析

1、分析用油脂の調整

乾燥のりを細切し、5倍量のエチルエーテルを添加後、1分間ばげしくしんとうして6650で分別し、50℃附近で蒸溜後、100℃で1時間乾燥後、検定用油脂とした。

2、動植物油脂と鉱物油の推定

被害を与えると考えられる工場廃液は、新川沿の工場からみてナタネ油製造工場、屠殺場廃液の動植物油と、自動車修理工場洗滌液の鉱物油が考えられる。

そこで動植物油は石鹼の原料となり、油脂に不鹼化物例えば鉱物油などが混つていると、鹼化価は非常に減り、不鹼物が増加するが、のり附着油は鹼化価が高く、不鹼化物が少いことからのりに附着していた油脂は動植物油と推定出来る。

3、動物油と植物油の推定

各油脂の特数は略一定な特数を有するので2,3特数を測定した。

品名	鹼化価	ヨ一ソ価	不鹼化物	備考
ナタネ油	167~180	94~107	0.5~1.2	油脂化学便覧 による。
大豆油	188~196	114~138	0.2~0.5	
豚脂	193~202	46~70	0.1~0.4	
牛脂	190~202	25~60	0.1~0.3	
のり附着油	212,45	52,66	0,16	水試分析

下記分析値を比較検討すると、鹼化価は少々高い値を示したがヨ一ソ価及び不鹼化物量は豚脂及び牛脂の特数と略一致した。

4、結論

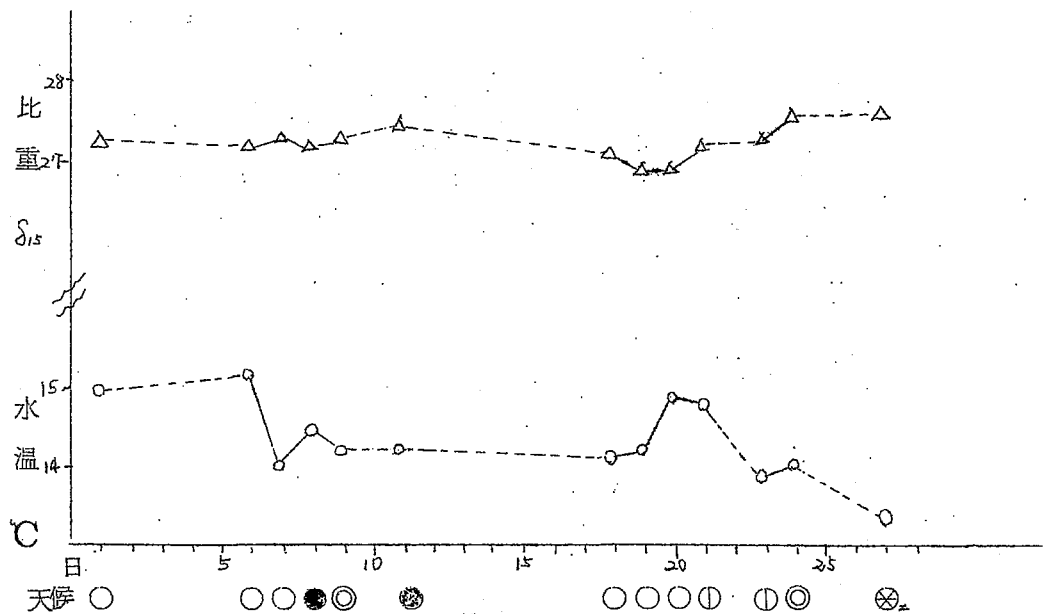
- (a) ノリ附着油脂の鹼化価が高く不鹼化物量が少ないことから鉱物油でなく、動植物油である。
- (b) のり附着油脂の特数が豚脂及び牛脂の特数と非常に類似し、ナタネ油、大豆油には該当しない。
- (c) 従つて今回のノリ被害の主原因は動物油を多量に含む工場廃液であると想定される。

定 置 観 測 (2月分)

養 殖 部

水温は最低温期にはいり、最高 / 5.2℃ (上旬)、最低 / 3.3℃ (下旬)、平均 / 4.3℃ を示した。しかし各旬平均にみられるようによろやくその降下度は小さくなり、略 / 4℃ 台で安定期に達した。先月の平均水温が平年の2月平均水温、すなわち最低温期に相当したが、それよりも更に -1.2℃ の低下を示していること、過去6ヶ年間 (28~36年) の観測記録から / 4℃ 台を割つたのは32年の2月中旬のみで、その時の最低水温 / 3.8℃ よりも更に本年は -0.5℃ の低下を示している事から本年 / 月以来の異常寒波の影響が顕著に表われてきているといえよう。なお、本年最低気温期 (1月下旬) と最低水温期 (2月下旬) は略 / ヶ月のずれがあると思われる。

比重は中旬の若干の降雨により27台を割つたが、最高27.59 (下旬)、最低26.92 (中旬) に示されるようにその差0.67で先月に続き良く安定している。



旬 間 平 均 表

	表 面 水 温 ℃			換 算 比 重 δ_{15}		
	平 均	前 旬 差	平 年 差	平 均	前 旬 差	平 年 差
上	14,6	-0,4	-1,0	27,25	-0,08	+1,86
中	14,4	-0,2	-1,0	27,11	-0,14	+1,75
下	14,0	-0,4	-1,5	27,42	+0,31	+2,28
月平均	14,3	-1,2	-1,2	27,26	-0,09	+1,94

(但し、平年水温は1953年～1960年、平年比重は1952年～1956年迄の各平均)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
 ☆ 奄 美 短 信 ☆
 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆

記録的異常発達をとげた雲雪は各地で猛威をふるい百年来の豪雪とまで騒がれて各地に未曾有の冷雪害をもたらしたが、3月中旬とはいえ、2mに余る残雪をみながらなだれの危険にされされた気の毒な地域もあるときく中に、もう奄美の島々はすっかり春だ。一雨毎に草木の新緑もさえて全く春の感触で一杯だ。ことさら冷害もなく更にはめずらしく台風等の天災からも免れてまづまづ平穏な37年度であつた。

愈々38年度を迎えるわけですが今年は奄美復興10ヶ年計画事業の最終年度でもあり、更に39年度から始められる振興計画や沿岸漁業構造改善事業の受入態勢確立と大島の漁業者にとって一大転期を覚悟しなければならない大事な年になりそうである。

こゝ数年来わが国の経済は急速な成長を続け、今や全ゆる産業が世界の自由競争に耐え得るよう国を挙げて抜本的な施策を迫られ、又着々とその合理化、近代化が計られつゝある。こういった情勢の

中で最も立ち遅れをみている零細な沿岸漁業についても構造改善対策を打出し近代化を計ろうとされている。

たまたま2月26日当分場会議室において大島地区の沿岸漁業構造改善協議会が開催され県の基本構想の説明や地元の要望等を傍聴する機会を得たが、資料によると地域毎の漁業の実態や、生産性等について綿密な調査分析が加えられ、沿岸漁業の生産性が如何に低く、現状のまま推移するならば他産業との所得の不均衡はますます拡大するおそれがあるので経営構造の改善近代化を計らねばならないということが強調されていた。

最も現実には大島の沿岸漁業の生産構成は貧弱で、沿岸漁民の生産基盤の確立と経営の改善近代化ということは何処よりも先に実現の必要を感じずるわけですが、さてこれの具体化となると容易でないようである。漁業生産の長期見透しに基いて生産性の高くしかも集約的経営組織、施策が地域の実情に応じて確立され、この実現には漁民の積極的意欲の誘発啓蒙に相当な努力の必要がありましょう。

(A 、 Y)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 各 部 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁 業 部

※ 照 南 丸

○ 2月 / 6日

第7次エビ資源調査(志在志湾)終了の上帰港。

○ 3月3日 鹿児島出港

西海区水研との共同調査でサバ標識放流(魚釣島近海で実施)及びモジャコ調査に従事。放流は漁況活潑のため予定尾数(2万尾)の半分を上廻るもよう。入港は3月3 /

日の予定。

※ か も め

- 2月25日～3月3日 水質調査（阿久根市沖合）
- 3月5日～11日 第8次エビ資源調査
- 3月14日～16日 定置漁場及び海産稚アユ調査
（福山沖合）

○ 製造部

- ※ 加工原料としてのカツオ類の凍結貯蔵に関する研究
（鹿大水産学部共同試験） カツオ節、カツオブライン漬、缶詰
の一般成分分析。
- ※ エルビット-N使用による塩干さばの酸化防止試験。
- ※ エルビット-N使用による塩干あじの酸化防止試験。
- ※ 2月18日～21日 簡易保蔵食品加工講習会（額娃、開聞）
- ※ 2月28日～3月2日 簡易保蔵食品加工講習会（西之表）
- ※ 2月28日～3月2日 人工餌料並びに煉製品調査研修
（仙崎、下関）

○ 養殖部

- ※ 2月18日～20日 ワカメ移殖指導（長島東町一瀬戸口）
- ※ 2月19日～20日 ノリ養殖状況調査（出水市一新村）
- ※ 2月22日 ノリ養殖指導（加治木一豊田、新村）
- ※ 2月26日～3月1日 水質調査（調査部応援）
（阿久根一藤田）
- ※ 2月26日～3月7日 魚類蓄養殖調査
（神奈川、香川県一豊田）
- ※ 2月28日 ノリ養殖調査（下こしき村一新村）
- ※ 3月7日～8日 ノリ養殖指導（野間池一新村）
- ※ 3月11日～17日 クルマエビ、ワカメ養殖調査
（大分、福岡、熊本県一藤田）

○ 調 査 部

※ 水質汚濁調査

阿久根沿岸地先海面の第2回水質汚濁調査を水質、底質、底棲生物、汀生物、潮流観察等の各項目に亘り実施、現在資料分析中。

※ タイの黒色防止試験

キダイ、マダイ約40尾を循環濾過水槽で、水色は赤、青、暗及び対象区に区分して黒色防止試験を実施中。

※ 汚水による魚類飼育実験

パルプ廃液の各濃度の異なる水槽に稚アユ、コイを放養しその影響度を調査。

※ 漁 場 測 量

ハマチ蓄養場とじば桜島口（南側）溶岩入江一帯の測量を実施すると共に水深、水質、潮流調査を行った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆ 分 場 の 動 き ☆
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

○ 漁 業 係

奄美大島のカツオ漁獲量はエサの量に絶対的な関係があるようなことを現在まで言われ、その対策等を言々されてきたが、先日37年度漁期の資料を整理、分析してみると相関々係はさほどないようである。詳細は沿岸漁業調査報告書に発表するが、偶然性、漁撈技術、漁場選択による影響が大きいようである。やはりエサ漁業の経営形態を改善しカツオ漁業の集団操業化方式への道を進むことが急務であろう。

○ 養 殖 係

※ 2月12、13日大島海峡久慈湾において、ヒレナガハギ、サザナミハギ、ヒフキアイゴ、イトトウダイ類、タテジマヤッコ、ブダイ、オオヨロイウオ、フグ類、甲イカ、キントキダイ類等約600Kgの底棲魚を主とした斃死現象がみられ、ダイナマイト、毒物、寒波その他環境異変という観点から海上保安部も立合い調査を行ったが解剖所見では、マイト、毒物等によるものとは考えられず、同時期に薩川湾武名地区においても斃死瀕死の状況のものがみられており、しかもこれまで例年のない寒波続きで水温も 1.4°C (17.6°C) 下つているところから異常寒波が死因の一つに考えられた。

※ 次に37年8月8日に人工受精によつて得たマベ稚貝を38年3月8日(7ヶ月目)に測定したが平均殻長6.25、殻高3.4 / 蝶番線長7.56%となり、これまでの成長状況と比較すると最も成長の早かつた35年でも5月26日測定殻長5.55、殻高3.1 / 蝶番線長6.96%であり成長期間が3ヶ月も短縮されている。一応水温も2月1日 17.7°C を最低に上昇してきているので今後一段と成長が早まるものと思われる。